

丹羽誠次郎展

2007年11月5日[月]-16日[金]
(10・11日は休み)10:00-18:00

主催：名古屋大学現代芸術研究会
共催：名古屋大学教養教育院

協力：青木孝夫

コーディネーター：馬場暁子/DMデザイン：森まき恵

名古屋大学教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学全学教育棟1階
052-789-4725 (名古屋大学教養教育院)
clas-info@vision.ss.is.nagoya-u.ac.jp
www.vision.ss.is.nagoya-u.ac.jp/clas/

展覧会の手引き

話をするときには、 相手の目を見ましょう。

「話をするときには、相手の目を見ましょう」。彼と初めて会ったとき、小学校の先生のようなせりふが思い浮かんだ。こちらと目を合わせずに話す姿は礼儀を欠くというよりも、「人間」というものを目にしすぎているがゆえにそれをできるだけ目に入れまいとしているように思えた。

その翌日、麻酔でまぶたが重くなる前のわたしの視野の右端に、黙々と準備をしている彼がいた。これから否というほど見なければならぬのだからせめてそれまでは目を背けていたいというような、自分の役割りに徹しながらも人としての気持ちが感じられるようなたまたまだった。

目を閉じたわたしは、時間や空間がなくなったような真っ暗な世界へ入り込んだ。それと入れ違いにわたしの身体が開かれて、

そこは生まれて初めて強い光に照らされた。いつも一緒にいて一番よく知っているはずなのに一度も目にしたことがないわたしの身体の中を、わたし以外の人間たちが覗いていた（ようだ）。

それからどれくらい時間が過ぎたのか、人々の声が遠くで聞こえた。まだ目を開けることができないわたしの名前を呼んでくれた彼の師である本間丈太郎は、まるでガラス玉のような目をしていて。やさしい目だが、普段は皮膚に包まれている「世界」をたくさん見てきた目。

病室へ戻って日に日にげんきになったわたしの目を見て話をしてくれた彼は、こうした日々と戦っているのだろうと思った。そうしてまた彼の目もすこしずつガラス玉のようになっていくのだろうか。別れ際にほんのすこしだけ微笑んだようにみえた彼の瞳の色は、心なしか深くなっているようだった。

馬場 暁子 (名古屋大学大学院情報科学研究科)

丹羽誠次郎さんへの 二つの質問

Q あなたの記憶のうち、あなたの目に初めて映ったものを教えてください。

2歳か3歳の夏にプールで（多分溺れて）沈んでいくときのイメージーゆっくりと沈みながら見ている水面の揺らめきと降り注ぐ光ーが僕の最も古い記憶です。普段眠っているときに見る夢や記憶の中の映像の多くは彩度の低いくすんだものばかりですが、この記憶だけはいまなお光に満ちあふれていて鮮やかなのです。

Q あなたの目が永遠に閉じる直前に、見たいものは何ですか。

あまり傷ましい光景を目にしたくない、だけで特に希望はありません。そこで、質問の意味をすこし変えて、「目が永遠に閉じるまでに、見たいもの」についてお答えします。

谷川俊太郎の詩「鳥羽」に「本当の事を云おうか」という一節があります。このフレーズを谷川俊太郎の詩そのものからではなく、大江健三郎の小説の章題に引用されていたところから知りました。前後の文脈からそこだけ切り離されて、投げ出された言葉は、（後から当たってみた）実際の詩の中に位置する時よりもずっと強烈な印象を与えました。そして、最初に出会った時から20数年を経た現在でもこの一節は、谷川俊太郎のものであって谷川のものでない、大江健三郎のものであって大江のものでない、無論ぼくのものではない、宙吊りされた言葉として、ぼくを魅了しつづけています。

「詩人のふりはしているが／私は詩人ではない」という本来つづくはずの言葉を失った「本当の事」、それはいったい何なのか分らないまま、確信に満ちたイメージとして心に残っています。そして、もしそれに会える事ができたならばきっとすぐさま「ああ、これが本当の事だったんだ」と了解できるようにも思うのです。

僕は多くの美術作品と接しながら、「本当の事」を描いている、「本当の事」が描かれている作品を見たいとずっと思っています。そしてそれが自分のつくった作品であったらどんなに素晴らしいかはいうまでもありません。